How About SHIZUOKA?

少子高齢化に伴う生産人口の減少が深刻化の一途をたどるなか、外国人を受け入れる取り組みが広まっている。静岡県内でも外国人を雇用する事業所は年々増加している。コンビニエンスストアやスーパーなどで彼らが働いている姿を見る機会も、増えたのではないだろうか。

一方で、私たちは彼ら外国人労働者が、日本でどのような環境に置かれているのか、知る機会が実に少ない。遠い祖国を離れ、異国である日本にやってきた彼らは、日本を、そして静岡をどのように感じているのだろうか。

（白木菜々美）

ムミノフ・オリムジョンさん（ウズベキスタン）

日本に来たのは２年ほど前です。ウズベキスタンにいたころ、無償の日本語学校で１か月ほど勉強していました。その時に出会った日本人がとても親切で、日本語に興味を持ち、さらに半年ほどウズベキスタンで勉強を続けました。日本語だけではなく、文化についてはインターネットで調べて独学で勉強しました。日本について調べると、安全で治安が良く、日本人もとても親切だと知って、実際に行ってみることに決めました。

日本に来てからは、東京の語学学校に通いました。卒業後、親せきが静岡にいた関係で、今は静岡の外国人向けのビジネス専門学校に通っています。ここでは主に、ビジネスマナーやパソコンの操作など、日本で就職するために必要なことを学んでいます。もちろん日本語も継続して勉強しています。

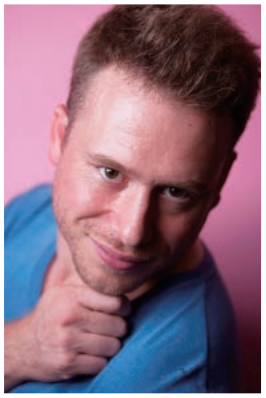
静岡では、東京で働いていた経験を生かして、コンビニエンスストアで働いています。一番大変なことはやはり漢字です。特に、新聞の名前を覚えることに苦労しました。毎日決まった時間に必ず届くので、その時間までに整理しておく必要があります。今でも漢字は苦戦します。

静岡と東京のコンビニエンスストアで働いていて感じる一番大きな違いは、言葉遣いです。東京では、多くの人が丁寧語で話していました。しかし静岡に来てから、「ください」ではなく「ちょうだい」、「あたためて」ではなく「あたためろ」、と言われることが多いです。日本語学校では丁寧語を基本にして学んでいたので、初めは聞いたことのない日本語に戸惑いました。このような言葉遣いをされるのは、自分が外国人だからなのではないか、と思います。日本人は親切だと聞いていましたが、もちろん全員が全員そうではなく、いい人もいれば悪い人もいるのだと感じた経験です。

日本語に戸惑うことはまだまだ多いですが、一緒に働いている日本人たちがとても親切に教えてくれます。日本ではあまり馴染みのないウズベキスタンについて、興味をもって聞いてくれる人がいてうれしいです。

専門学校を卒業してからのことは、まだまだ考えている最中ですが、静岡、そして日本での経験を生かしてウズベキスタンに戻って自分の事業を起こすことが目標です。

リガード・ウィリアムさん（アメリカ）



静岡に来たのは 10 年ほど前です。最初は日本人向けの語学学校の講師をしていました。毎日いくつもの授業をこなすので、経済的には安定していますがプライベートの時間を楽しむ余裕はあまりありませんでした。その後、転職して幼稚園で英語を教えることになりましたが、環境や待遇が決して良いとは言えず、また日本人の経営者ともうまくいかず、半年ほどで去ることにしました。

そのとき、愛知県で幼稚園を経営しているアメリカ人と出会い、そこで働くことになりました。日本人の経営者とうまくいかなかったこともあり、同じアメリカ人であることに安心しましたし、日本で働くために必要な知識や技術など、実に様々なことを学ぶことができました。働く環境としてとても整っていて充実していましたが、友人の多くは静岡にいました。何より静岡市の豊かな自然と温暖な気候をとても気に入っていたので、3 年ほど愛知県の幼稚園でお世話になった後、静岡に戻ることに決めました。

今は、私立学校のカリキュラムコーディネーターをしています。具体的には、英語を単語や文法を学ぶ独立した科目として生徒たちに教えるのではなく、数学や理科、音楽など他の科目の内容と関連付けて学べるよう、教科担任の先生たちと連携して授業内容を考える仕事です。

私の身近な友人たちの仕事を大きく分けると 3 つのタイプがあると言えます。語学学校の教師、ALT、日本企業の社員です。語学学校の教師は、先ほど述べたように経済的に安定してはいますが、授業やその準備に追われ、非常に忙しいです。それに比べて ALT は、学校にもよりますが週に2～3日の授業で、プライベートの時間も十分に確保することができます。日本にやってくる多くの外国人は、日本の文化や日本語に関心をもっていて、日本語を学んだり、日本でさまざまなことを経験したいと思っています。ですので、仕事に追われてしまうよりも日本語を勉強したり、日本人の友人をつくって遊んだりできる時間がある ALT が、一番充実しているかもしれません。日本企業で働くことは、この中では一番大変だと思います。ただ、私の友人たちの話を聞く限りでは、残業や社内の関係など、日本人とさほど変わらない悩みが多いと思います。それほど社会的な問題でもあると言えるでしょう。

これからも日本には外国人が大勢やってくるでしょう。様々な人種が混ざることで、これまでの日本の「当たり前」が通用しない人たちもいると思います。しかし、彼らは決して日本のこれまでの文化や伝統を変えてほしいわけではありません。なぜなら彼らは日本の文化や伝統が好きで興味を持って日本にやってくるからです。ほんの少し、日本にやってくる彼らに対応してくれればよいだけだと思います。例えば、地図や看板にローマ字で "jinja" と表記するのではなく "shrine" とするような、ごく些細なことです。

とはいえ、外国人と出会う機会が少ない人も多いでしょう。それは一方で、日本人と出会う機会が少ない外国人もいるということです。それを同時に解消できるようなコミュニティを作りたいと思い、3 年ほど前に SHIZUPOP を立ち上げました。毎週木曜日にバーに集まって年齢、語学力問わず楽しくおしゃべりするイベントや、日本の文化に触れられるようなワークショップを企画しています。偏見の多くは、コミュニケーションを十分にとっていないことによる無理解だと思います。まずはポジティブに、オープンにしてみることで日本人も、外国人も、相互に理解し合えるのではないでしょうか。

SHIZUPOP（https://www.facebook.com/SHIZUPOP/）

外国人労働者の増加のみならず、東京オリンピックを目前に控え、私たちは外国人への対応をどうしていくべきなのか。そのヒントが、先述の彼らの話の中に散りばめられていた。難しいようで、案外些細なことなのではないだろうか。彼らを知ることで、私たちのことも知ってもらう、相互理解が促されるのだ。「相手を理解したい」という思いに年齢も語学力も関係ない。彼らと出会ったら、まずは一歩踏み出してみることから始めてみよう。

静岡のものづくりを照らす

～本橋テープ株式会社～

本橋テープ株式会社は、榛原郡吉田町に本社を構える細幅織物（テープ）の製造業社である。

国内生産される鞄向け素材を得意とするこの会社は、2010年（平成22年7月）に「男女共同参画社会づくり宣言」を出し、女性活躍推進をはじめとする様々な取り組みを行っている。

成長を続ける地元企業の「人財」は、その力を存分に発揮し輝いていた。

代表取締役　本橋（もとはし）真也（しんや）さん

もともとこの業界では、「男性が機械を扱う主な仕事をし、女性はその準備をする」という認識が広く浸透していて、未だに分業が残っていると言えます。そんな中で、先代の社長が男女の差をなくす取り組みを始め、その流れを今も受け継いでいます。２０１０（平成22）年の「男女共同参画社会づくり宣言」もそのひとつで、そこから女性活躍の推進、若者の雇用促進、高齢者の継続雇用など、老若男女それぞれが働きやすく、活躍できる場を今後も作っていきたいと思っています。

輝いている女性にスポットを当てる

本橋テープでは、鞄の材料の一つとしてテープを製造していますが、「もっと細幅織物（テープ）を知ってもらいたい」という思いから、キーホルダーやペット用品を作り始めましたが、当初、決して売り上げは良くありませんでした。

ある時、若い女性社員（岩谷桃子さん）が、織られたテープを裁断するときに出る切れ端を使って、小さなポーチを編んで見せてくれました。その後、様々なサイズのポーチを制作し、のちにオリジナルブランド「拵（こしらえ）」の人気商品となるトートバッグが生まれました。

彼女は、母親がここで働いていたことからアルバイトとして働き始めました。デザインのスキルなどを存分に発揮し、貢献してくれました。その後、正社員として採用、今は加工グループのサブマネージャーを務めています。

新たな試み

令和元年度、静岡県立吉田特別支援学校から１人、新卒採用することになりました。障がいのある社員と働くことに関して、当初は現場から「負担が増えるのではないか」と、不安の声があがりました。そこで、就労継続Ｂ型事業所である、「特定非営利活動法人こころ・さがら作業所」との連携事業や、近隣にある吉田特別支援学校の生徒を実習という形で受け入れ、従業員が障がいのあるたちと接する機会を設けました。その中で、さがら作業所の方が、「自分ができることを紹介してほしい」と、一緒にイベントに参加して、「障がい者が制作に携わっている商品です」と、自信をもって発信していました。

こういった活動を始めるまでは、障がいのある人は表に出たがらない人が多いと思っていました。しかし、直接彼らと接するうちに、「健常者も障がい者も変わらないのだ」ということを実感しました。できる範囲は限られていても、ものすごい集中力を発揮する人や、独自の色彩感覚を生かしたものづくりをする人がいました。そんな体験から、現場の意識も変わっていき、今年度の採用につながりました。

細幅織物（テープ）とは？

鞄のショルダー部分などに主に使われる幅13㎝以下の織物のこと。本橋テープでは、加工業向けのテープ製造のみならず、2011年にオリジナルブランド「TENSYA（てんしゃ）」を立ち上げ、自社製品の制作にも力を注いでいる。

加工グループ サブマネージャー　岩谷 桃子さん（29）

テープを加工する中で、少しでもほつれているものは、はじかれてしまいます。それがもったいないと思い、何となく編んで作ったものを社長に見せたところ、とても気に入ってもらい、商品化に繋がりました。

私は今、妊娠9か月目（取材時）で、この会社で役職として初めての産休・育休制度の利用者になります。社長をはじめ、多くの仲間が産休・育休についてどうしていくべきか、今年の3月頃から話し合いを重ねてきました。結果として8月10日から産休、出産後1年間育休を取得することになりました。産休までの間、多くの仲間が支えてくれて、安心して働くことができました。自分の経験を生かして、今後、産休・育休制度を使う女性社員には、産休までの仕事の割り振りを体調に合わせて考えていくことや、妊娠中、思うように働けないことで感じる不安を取り除けるような心のケアもしていけたら、と思います。

2019年度（令和元年度）入社　小谷 夢月さん（19）

はじめは、支援学校の授業で本橋テープの製品を作っていました。それから、手先を使うことが好きだったので、得意なことを生かしたいと思い、2年生と3年生の時に本橋テープの実習に参加しました。とても充実した実習で、「ここで働きたい」と思いました。実際に働いてみると、やはり実習生だった時と社員として働く今は責任感が違い、苦労もありますが、笑顔を忘れずに楽しく働いています。

日本のものづくり産業は、生産年齢人口減少による労働力不足に悩まされ、労働環境の整備に手が回らない企業も決して少なくない。そんな中で、本橋テープは着実に「人財」を確保・育成して結果を出している。老若男女問わず活躍できる会社のあり方は、大企業でしかできない理想論などではなく、地方に根差した中小企業こそが、これからの日本を生き抜いていくため手掛かりの一つなのだ。

（白木 菜々美）